

リス語の研究

——タイ国ターク県におけるリス族の言葉の予備報告——

西 田 龍 雄

A preliminary study on the Lisu language in Tak province

by

Tatsuo NISHIDA

ま え が き

1965年1月8日、わたくしはチェンマイからジープをとばしてタークに到着した。翌日ターク県庁から回されたジープで町から38kmの地点にあるNikhomをおとずれた。タークのNikhomの管轄内には、ラフ・ナ族(Nikhomから約0.5kmの地点にある)、リス族(約3kmの地点)、およびミャオ族(約5kmの地点)の三つの部落がある。

わたくしは、まずラフ・ナ語の調査からはじめ、その調査をいちおう終えた1月の終わり頃から、リス族の言葉の調査にとりかかった。

ここに発表するのが、そのタークのリス語についての予備的な調査報告である。本稿は、リス語の音素構造および文法体系を概略的に記述することを目標としている。¹⁾

I リス語の分布地域と従来の研究

1. リス語の分布地域はかなり広い範囲におよんでいる。まずリス族の本拠地と考え得る中国雲南省の西部からビルマとの国境地域一帯にもっとも多くリス族がいる。この地域から、西と南に下ってビルマのカチン州の東部および西部の地域とシャン州の東の地域、そしてずっと南下してタイ国北部の数県に、リス族は点在している。²⁾ したがって、現在わかっている限りで、リス族の分布地域を大きく分けると、つぎの四つになる。³⁾

1) この調査に多くの援助を与えて下さったタイ国学術研究会議ならびに内務省とくにNikhomの方々に厚く感謝しなければならない。わたくしの今回の言語調査については、つぎの拙稿をみられたい。西田龍雄「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』3巻3号、「アカ語の音素体系—タイ国北部における山地民アカ族の言語の記述的研究」『音声科学研究』IV1965/66、「ビス語の研究」『東南アジア研究』4巻1号。

2) F. M. Lebar, G. C. Hickey and J. K. Musgrave, "Ethnic groups of mainland Southeast Asia," HRAF. 1964. p. 27-参照。

3) この分類は、便宜的なものとしてかりに掲げたものであって、今の段階では厳密な分類は出来ない。

A 中国雲南省

- a. 怒江リス族自治州 b. 騰越（今の騰衝）周辺 c. 麗江専区など数地点

B ビルマ・カチン州

- a. マイカ (Nmai hka) の上流地域 b. プタオ周辺 c. モゴク (Mogôk) 周辺

C ビルマ・シヤン州

- a. バモ周辺 b. 南シヤン州

D タイ国北部の諸県

- a. チェンライ県, メ・スワイ周辺 b. チェンマイ県, チェンダオ周辺
c. メーホンソン県, 東端地域 d. ターク県, ターク周辺⁴⁾

リス族の分布は、このように中国、ビルマ、タイ三カ国にまたがる広い地域にわたっているために、それらの部族間の方言もかなり大きいことは十分に予測できる。しかし、これらの地域のリス語で調査されていない言葉のほうが多いために、この予測を全般にわたって確証することは、現在の段階では不可能に近い。リス語についての断片的な報告はこれまでにいく種類もあった。たとえば Prince Henri d'Orléans の旅行記 *Du Tonkin aux Indes* (Paris: 1898), その英訳 *From Tonkin to India* (London: 1898) につけられたわずかな語彙。またそれから引用した G.A. Scott の *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*, Pt. 1, Vol. 1 (Rangoon: 1900) の語彙。Davies の *Yünnan* (Cambridge: 1909) につけられた 160 語ほどの語彙, Liétard の *Notes sur les dialectes Lo-lo* (BEFEO 9, 1909) に提供されたごく少数の語彙などは、言語学の目的のためには使えない。

既発表の資料の中で、声調表記をともなった信頼できる研究としては、つぎの三つに限られる。

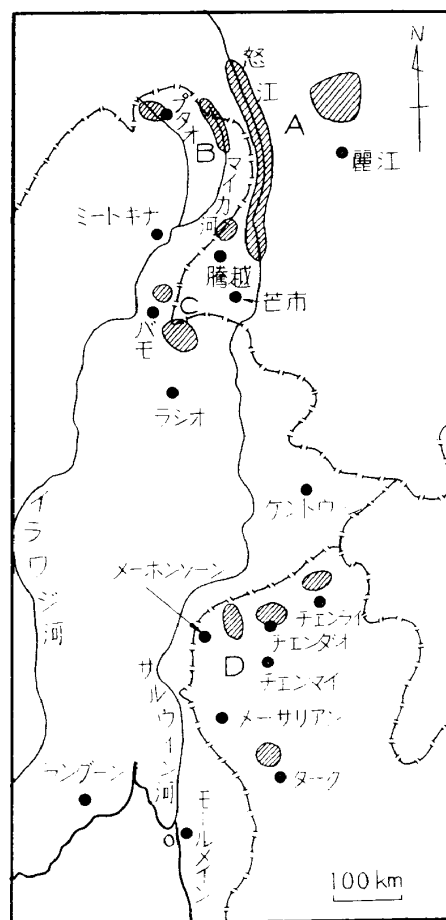


図1 リス族分布図 (A-D地域)

- (1) F.O. Fraser, *Handbook of the Lisu (Yawyin) Language*, Rangoon : 1922.

4) リス族の人口は正確にはわからないが、Lebar の書物(上掲)では、つぎの数字があげられている。中国のリス 317,000 (1953年の中国の統計にしたがう)、ビルマのリス 30,000 (Leach はカチン地域のリスを15,000とする)、タイのリス 17,300。そして、全人口はおそらく40万をこえるだろうという。Народы Восточной Азии (1965 Москва) でも、同じく53年の中国の統計にしたがって、中国のリス族を317,000としているが (p. 32), Народы Юго-Восточной Азии (1966 Москва) では、1965年の統計によるとして、ビルマのリス4万、タイのリス2万計6万人の数字をあげている (p. 17)。『傈僳語語法綱要』(1959)によれば、雲南のリス族は約235,000人と報告しているから、全体で30万人前後と考えられる。

(2) 芮逸夫「記栗粟語言兼論所謂栗粟文」歴史語言研究所集刊 17, 1948 (pp. 303-326)

(3) 中国科学院少数民族語言研究所編『傈僳語語法綱要』北京：1959。

(1)の資料は、雲南省騰越周辺の方言を中心に記述したリス語入門書であり、龍陵およびミートキナ・バモー、少なくとも北部シヤン州のリス族に共通の言葉を対象としている。これは上記Cの地域のリス語を代表すると考えて差支えがない。(2)の資料は、雲南省西部地域の花リス族を対象として、その音素体系を記述した論文であり、基本語彙約 270 語が集録されている。(3)の資料は、上記Aの地域。リス族がもっとも多く住む雲南省怒江周辺のリス語を対象とし、既発表の研究のうち、もっとも内容の豊かなものである。しかし文法記述が主体であって、語彙はまとまった形で提供されていない。

この三つの資料からAの地域、Bの地域そしてそれらからCの地域のリス語も概略推測できるが⁵⁾、Dの地域のリス語については、まったくわからなかった。これまでに断片的な報告さえも発表されたことがなかった。本稿が対象とするターク周辺のリス語も、管見の及ぶ限り、筆者が調査する以前には、一度も調査されていない。

2. Davies が、その著書 *Yunnan, the link between India and the Yang-tze*. において、リス語をチベット・ビルマ系のロロ・グループに入れ、ラフ語やアカ語に近いと述べて以来、この言葉の系統的帰属が定められ、一般にその分類法が受け入れられている。しかし、その説が果たして正しいかどうかを言語学的に論証されたわけではない。⁶⁾ R. Shafer の “Phonétique historique des langues lolo,” (TP. vol. 41, 1952, pp. 191-229) はプノイ語、アカ語とロロ方言との比較研究を目指したものであったが、何故かリス語はそこに含まれなかった。リス語の比較言語学的な研究は、わたくしの「ビルマ語とロロ語——その声調体系の比較——」(『東南アジア研究』1巻4号, 1964, pp. 13-28) においてはじめて試みられた。拙稿はとくにトネームの比較研究によって、ロロ諸語(ニー方言、アヒ方言)とハニ語、リス語、ビルマ語との間に規則的な対応関係を定立することを意図したものである。そこではリス語については上掲 Fraser の書物によって代表されるC地域の言葉を用いた。しかし、リス語は比較研究にとっても扱い難い対象であった。それはこの言葉の記述のむづかしさにも起因している。わたくしはタークのリス語を調査する機会を得たお陰で、ロロ系諸言語の比較研究にとっても、新しい資料を加えることになって、いくつかの疑問点をも解消することができた。それについては別の一文において論じたい。

3. タイ国北部の山地民の間では、リス語がもっともむづかしい言葉とされている。リス族は、ラフ語やアカ語やタイ語を、まれには雲南漢語をも話することができるが、ラフ人やアカ人でリス語を話す人はごく少ない。第1に発音が極めて厄介である。したがって、リス語の記述分析

5) Cの地域のリス語は、筆者が1959年にミートキナにおいて調査したことがあり、少量の資料がある。

6) わたくしはもちろんこの説には賛成であり、それらの言語の間に多くの対応関係を発見している。

も容易ではなかった。

この調査は、タイ語を媒介として行なった。質問に用いたタイ語をそのまま直訳的に置きかえることもあったが、調査は短期間ながら順調にいった。インフォーマントは、当時42才の男性A氏になってもらった。A氏はリス語のほかに、タイ語とラフ語を話した。そのほかのA氏の経歴については詳細な点はわからないが、リス語のインフォーマントとしては好適な1人であったと思う。このインフォーマントの一代前に、この部落を含むリス族の一団がビルマからタイ国北部に移動し、当時から2年前（1963年）にその部落全体が、チェンライ県、メ・スワイ (mae saruai) から、ターク県に移住した。この部落は40戸ほどの小集団ではあるが⁸⁾、現存するリス族の中でもっとも南下して現在なおそこにとどまっている唯一の部落である。⁹⁾

このリス族の言葉をリス語ターク方言と呼んでおきたい。

II リス語ターク方言の音素体系

つぎに、リス語（ターク方言）の音素体系を簡略に記述する。

1. リス語の一つの形態素は、大部分が一音節である。そして一音節は一種のトネーム(声調)をともなった CV または CVn [Cは CC 子音結合を、Vは VV 母音結合をそれぞれ含む] 形式をなして、そのほかの結合形式はない。リス語の単純単語は、1形態素あるいはそれ以上の形態素の連続形式をとり、実際には、2形態素から成る単語が圧倒的に多いから、発話の最小単位は、とじたつながり関係にある CV・CV 形式がもっとも多い。

まず、同系統の言語に対して見たリス語の音素体系の特徴をつぎに列挙しよう。¹⁰⁾

- a. 音節はすべて母音音素で終わる開音節である。CVn と表記したのは鼻音化母音を示している。(cf. p. 61-)
- b. 子音音素体系には、voiceless の series と voiced series の対立がある。(cf. p. 55-)

7) たとえば“body”は、Fraser では gaw³-dē⁵ になっていて、つぎの対応関係をたてたが(拙稿 p. 21).

Nyi kuw³³ Ahi kx²² Hani kə⁵⁵ Lisu gaw³- Bur. koy

このリス語形をターク方言形/koh-dəh/に置き換えれば、その対応関係が一層明瞭になる。また、

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
“to look”	ne ⁴⁴	ni ⁴⁴	mo ³³	nyi ³	mraŋ-

は、リス語に“to look”/təh ñih/ と “to see”/moh-ʔah/ の2形式があるのがわかって、つぎのように改めることができる。

	Nyi	Ahi	Hani	Lisu	Bur.
“to look”	ne ⁴⁴	ni ⁴⁴	ʔ	ñih ³³	ʔ
“to see”	ʔ	ʔ	mo ³³	moh- ³³	mraŋ-

8) タークのリス族は、その服装から黒栗栗、白栗栗、花栗栗の三つに分ける中国慣用の分類法にしたがうと、花栗栗(模様リス)にあたる。

9) G. Young によれば、一度タークに移住した数部落は、一部落をのこして、もとのチェンマイ県に帰ったと述べられている。(The Hill tribes of Northern Thailand. The Siam Society, 1962. p. 28)

10) これは、比較言語学的な意図ではなく、言語類型的に見た意見である。

- c. 母音音素体系には、普通母音に対立する緊喉母音(喉頭を緊張させて発出する母音)の series がある。(cf. p. 62)
- d. 普通母音の音節がとるトネームの種類と緊喉母音の音節のとるトネームの種類とは重複した分配関係を示す。(cf. p. 52)
- e. 緊喉母音と初頭子音の結合には、限定関係は認められない。
- f. リス語は一つの音素が相補関係にある変形 (allophone) をもつことが多い言葉である。換言すると、同じ音素が特定の環境において変形する傾向を強くもっている。(cf. pp. 58, 59, 60)
- g. 漢語とタイ語から借用された単語がかなり多数にあって、本来のリス語の体系に、新しい特徴を加えている。たとえば、CVn 音節タイプを作る (cf. pp. 63, 64), /f/ 音素を加える (cf. p. 60), 特定の母音音素結合を許す (cf. pp. 63, 64), 下降型トーンを単独で用いる (cf. p. 53) など。

以下、これらの特徴をより具体的に記述する。

2. トネーム (声調)

リス語のトネームは、高平型、中平型、低平型の level tones と上昇型の gliding tone を基本調とする register-contour mixed tone system をとっている。そして、上に列挙したごとく (c.d), この方言では、母音音素に普通母音と緊喉母音の2系列があって、その対立がトネームの型および型の分配関係と密接に結び付いている。トネームの基本的な対立関係は、つぎの例から明らかである。

普通 (非緊喉) 母音

緊 喉 母 音

(1) [mɔ : aŋ⁵⁵ :] “to aim”

(2) [mɔ : aŋ³³⁵ :] “to see”

(3) [ʔa⁵⁵ mɔŋ¹¹] “horse”

(4) [mɔŋ³⁵] “doctor”

(5) [ʔa¹¹ mɔ⁴⁴ mɔ⁴⁴ aŋ³³ :] “to be high”

(6) [mɔŋ²²] “grass”

母音音素の緊喉・非緊喉の性格とトーン型の分配関係は、リス語とすでに発表したビス語やアカ語の間でかなり違っている。しかしあとで述べるように、リス語で普通母音と緊喉母音の差異が職能的な対立を示していると認めるならば、緊喉母音のとるトーンの型が普通母音よりも少し高い register であっても、(2)の[³³]と(5)の[⁴⁴], (3)の[¹¹]と(6)の[²²]は、それぞれ中平型および低平型に該当する完全に補い合う allotone であると言うことができる。

したがって、リス語で意味の弁別をになうトーン、すなわちトネームは4種であると認めて差支えがない。ここで用いるトネームの表記法と母音音素の二系列に対するその分配関係を示すとつぎのようになる。(母音の表記は母音音素の項をみられたい p.61-)

普通母音 (非緊喉)

緊 喉 母 音

(1) 高平型 /móh-ʔah/ “to aim”

- (2) 中平型 /moh-ʔah/ “to see” (5) /ʔa-mo mo-ʔah/ “to be high”
 (3) 低平型 /ʔa-mòh/ “horse” (6) /mò/ “grass”
 (4) 上昇型 /möh/ “doctor”

この基本型のほかに、タイ語から借用された単語形式に下降型トーンがあらわれることがある。たとえば、

[ke:o 4:1] “glass” <Thai kĕəw

[lek² 44 lu:a 4:1] “saw” <Thai lèg, lâaj, N. Tai, lék, lya

[tsa 33 k'e:41] “crocodile” <Thai cōrakhêe

この下降型はごく限られた数の借用語にのみあらわれて、それに対立するほかのトーンをもつ形式がないから、たとえば [ke:o 4:1] に対する [ke:o 55:] とか [ke:o 33:] がないから、これを5番目のトネームを代表するトーン型とは認めず、中平型および低平型連続の変型として扱っておきたい。¹¹⁾ この扱いの根拠には、借用語でない単語形式の低平型トーンが、その変型として下降型をとる現象がある。たとえば

[ʔa 55 k'ufi 11 ʔə aŋ 224] “戸を叩く” の高・低、低・昇の連続に比べて、その否定形式では、

[ʔa 55 k'ufi 11 ma 11 ʔə 21] “戸を叩かない” のように、高・低、低・降になる。この [ʔə 22] と [ʔə 21] は、明らかに [-aŋ] と [ma 11-] の環境の違いによる変型である。

リス語のトーンの変型現象はかなり複雑である。たとえば、[mof 11 gua 33 gua:fi 55:] “to sing” における [mof 11 gua 33] と [gua:fi 55:] の中平型と高平型の対立は、意味における対立 “歌” と “唱う” をになう二つの形態素を示していると認め得るが、つぎの例、

[tʃ'of 11 pa 55 zə 22] “man” [gua 33 tʃ'of 11] “friend”

[tʃ'of 55 mof 11] “old person” [laŋ 11 tʃ'of 55] “human”

における [tʃ'of 11] と [tʃ'of 55] は、同一形態素の変型として扱わざるを得ない。¹²⁾ しかし、この2形式は、同じ環境にあらわれて、その変型の条件がすっかり明らかではない。

このことと関連して、[ʔaŋ-] にはじまる単語のトーンについて論じよう。[ʔaŋ-] を第一形態素とする単語のトーン連続には、いちおう四つのタイプを設定できる。

- i) 高・低型 ii) 低・高型 iii) 低・中型 iv) 低・昇型。

例 i) [ʔa 55 naŋ 11] “dog” [ʔa 55 ŋə 22] “buffalo”

[ʔa 55 t'aŋ 11] “knife” [ʔa 55 və 22] “pig”

ii) [ʔa 11 toŋ 55] “fire” [ʔa 11 t'uŋ 55] “thick”

[ʔa 11 ji: 55] “wide”

11) これらの音節は、リス語としては [ke: 44] [o: 41]/keh-ʔòh/[le 44] [lu: 44] [a: 41]/le luuh 'àh / [tsa 33] [k'e: 41] / tsah / kheh ʔèh / と分析する。

12) かりに [tʃ'of 55] / tshóh / を基本形式として、[tʃ'of 11] はその変型として扱う。

- iii) [ʔa₁₁ mɔ̌ 44] “high” [ʔa₁₁ mɔ̌ 14] “who”
 [ʔa₁₁ tsʷɸɸ 33] “true” [ʔa₁₁ tɪɸ 33] “few”
- iv) [ʔa₁₁ tɕɪɸ 35] “breast of woman” [ʔa₁₁ tɕʷɸɸ 35] “axe”
 [ʔa₁₁ jɪɸ 35 zɔ̌ 11] “lizard” [ʔa₁₁ nɔ̌ɸɸ 35 tsʷɸɸ 33] “cat”

もし、[?a-]にはじまる単語が、すべてこの四種のタイプに属するのならば、核形態素の低平型トーンが、この変調を決定づけていると言うことが可能である。

〔先行形態素〕	高平型	〔核形態素〕	低平型
	低平型		高平，中平，上昇型

しかし、実際には核形態素が低平型以外の場合に、この原則に反する例が少数出てくる。

- [ʔa⁵⁵ paŋ⁵⁵] “grandfather” [ʔa⁵⁵ nɔ̌⁴⁴] “beans”
[ʔa³³ muŋ³³ sa²²] “now”

[-aŋ] に終わる形態素連続にも同様な変調現象がある。

- i) [-a : fi 35], ii) [-afi 5], iii) [-afi 3], iv) [-a : fi 41] が観察される。
- i) [nœ : a fi 335 :] “to smell” [tæ : a fi 335 :] “to hold”
[ŋu : a fi 335 :] “to cry” [kʷ a fi 235 :] “to bite”
- ii) [bɔ : a fi 55 :] “to write” [pʼa : a fi 55 :] “to be stout”
[kw : a fi 55 :] “to be false” [wu : a fi 55 :] “to buy”
- iii) [dʒu a fi 33] “to fear” [dɯ a fi 33] “to sever”
[kʷ a fi 33] “to call”
- iv) [sw : a fi 55 : 1] “to know” [tsu fi 55 mɯ a fi 44 : 1] “to memorize”
[meh de : a fi 44 : 1] “to forget” [nifi 35 ma xa : a fi 55 : 1] “to be glad”

この iv) のタイプはかなり長く $[a:fi_4:1]$ となって、ある感情があらわす形態素が加わっているのである。これは、 $[su:afi]+[afi_2]$, $[ni-ma]+[xa:afi]+[afi_2]$ のように考えてよい。これをのぞくと、i) ii) iii) は、つぎのような分配関係をとっていることがわかる。

〔核形態素〕	高平型	〔付屬形態素 aŋ〕	高平型
	中平型（非緊喉）		上昇型
	低平型（非緊喉・緊喉）		上昇型
	上昇型		上昇型
	中平型（緊喉）		中平型

このうち、中平・上昇と、低平・上昇の結合は、ほとんど同じように聞こえる。しかし、主核形態素のトネームを弁別する手段がないわけではない。それらの形態素は、別の二つの環境 [ma 11-] を先行する否定形式（環境 environment B）と、[-ɣQ 44] をともなう完了態形式（環境 C）において、はっきりと弁別できる。

(環境B) 否定形式

[ma¹¹ nœh³³][ma¹¹ ŋuŋ³³][ma¹¹ k'q²²][ma¹¹ tæh³⁵]

(環境C) 完了態形式

[nœh³³ ɣq⁴⁴] 中平型[ŋuŋ³³ ɣq⁴⁴] 中平型[k'q²² ɣq⁴⁴] 低平型[tæh³⁵ ɣq⁴⁴] 上昇型

したがって、リス語の形態素 (group V) のトネームは、環境BまたはCにおいてとらえるのがもっとも有効である。

3. 子音音素

リス語の子音音素目録は、31種の単純音素と3種の音素結合から成りたっている。

単純音素は、つぎのように分類できる。

	stops	affricates	fricatives	nasals	lateral
velar	k kh g ʔ :		: x ɣ h h̃ :	ŋ	
labial	p ph b :		: f v :	m	
dental	t th d :	ts tsh dz :	s z š j :	n ñ :	l

本稿のはじめに、この言葉の子音音素の特徴として、voiceless : voiced の対立があることを指摘した。その対立は具体的には、velar, labial, dental の各系列で stop と affricate と fricative にいずれもあらわれる。しかし、nasal と lateral には、この無声 : 有声の対立はない。この特徴を簡単な表にするとつぎのようになる。(＋は対立があること、－は対立がないことを示す)。¹³⁾

	stop	affricate	fricative	nasal	lateral
voiceless : voiced	+	+	+	—	—
unaspirated : asp.	+	+	—	—	—

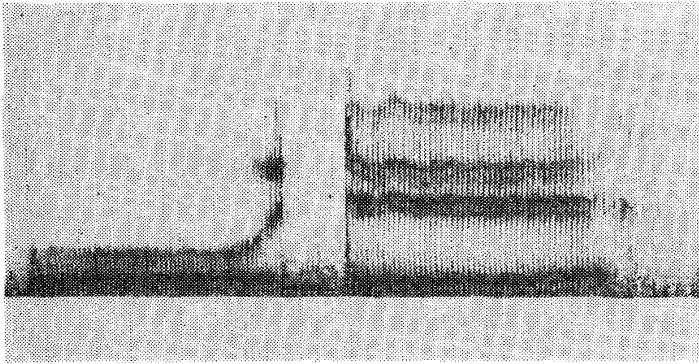
リス語の子音体系成立の概略を言うと、

- i) stop : affricate : fricative : nasal : lateral の調節法の対立
- ii) velar : labial : dental の調節点の対立
- iii) voiceless : voiced の声帯振動有無の対立
- iv) unaspirated : aspirated の氣息量の対立

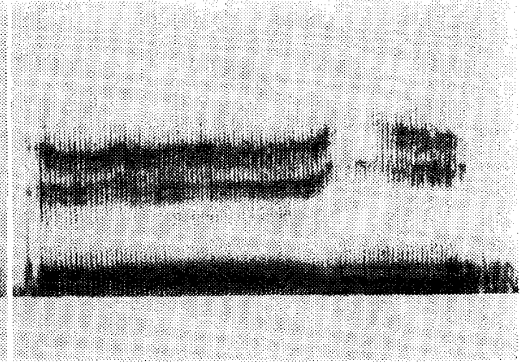
の四つが中心になっていて、その可能な組み合わせのなかに、適宜すき間があたえられていることになる。¹⁴⁾

13) この特徴をアカ語およびビス語の特徴と比べられたい。拙稿「アカ語の音素体系」(p. 10) ビルマ・ロロ系言語では、voiceless : voiced の対立があるのとないのとで類型的に大きい相違を示している。この点、リス語は、アカ語やビス語と類型的に近いことになる。

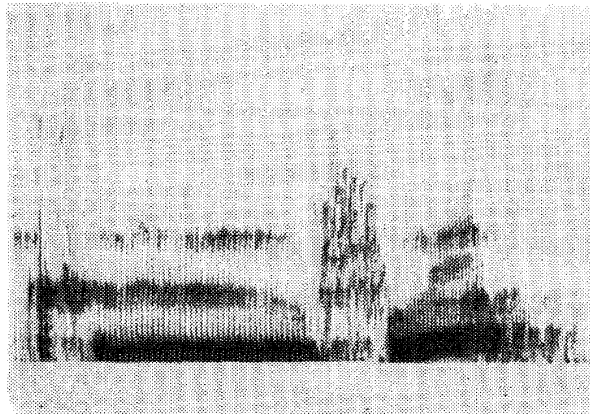
14) たとえば Sonograph による周波数分析パターンをあげると、次頁のようになる。しかし、ここでは、このパターンの対照から考え得る distinctive features の対立関係については解釈を加えない。



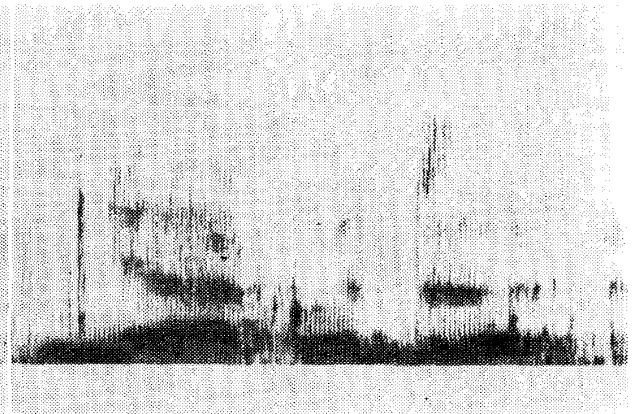
[wu: 55 dy: fi 11] "head"



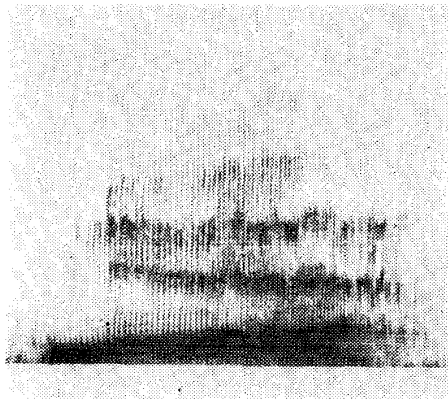
[tœ: 35 n̥ifi 33] "to look"



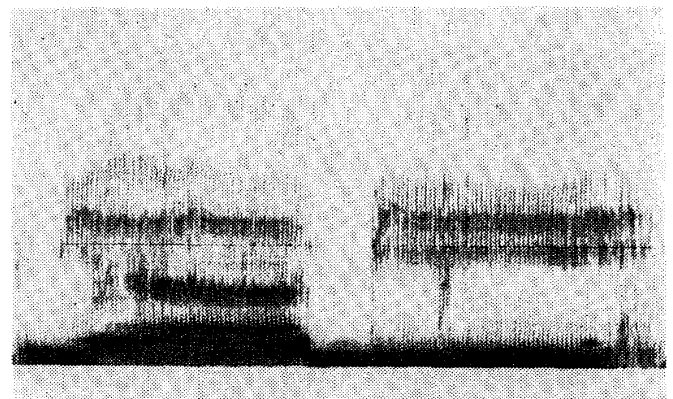
[k'w: 11 fu: aŋ 335:] "to yawn"



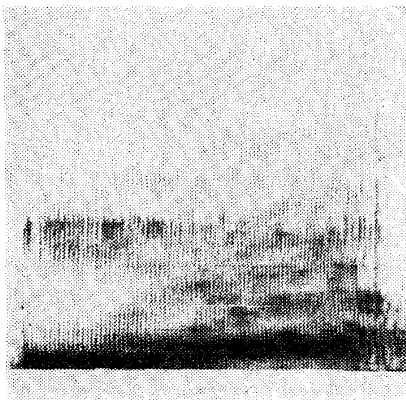
[m̥iã 11 ku̯ dzuɸi 11] "eye lid"



[nœ: aŋ 335:] "to smell"



[m̥iã: 11 bi: fi 55] "tear"



[ŋu: aŋ 335:] "to cry"



[m̥iã 11 suɸi 11] "eye"

sonograph によるリス語
の周波数分析パターン

この対立関係は、もっぱら音節の初頭にあらわれて、末尾の位置には子音音素はたたない。
つぎに、ターク・リス語の音声の性格と各音素の設定について述べたい。

1) 無声無気閉鎖音 /k, t, p/ /ʔ/

完全な閉鎖と破裂をもつ [k], [t], [p] が、たとえばつぎの単語で観察される。これらの音声は緊喉母音と結合する音節では、緊張度がやや強くなる。

[kɔ̃³³ dœ̃¹¹] “body” [kɯ⁴⁴ za¹¹] “star”

[tõ³⁵ ts’ã¹¹] “hoe” [tɯ⁴⁴ la¹¹ ã³³⁵] “to rise up”

[pɔ̃³³] “gun” [pã³³ læ¹¹ xɔ̃⁵] “to exchange”

この [k], [t], [p] は同じ環境 [#-ɔ̃] で対立するから、これらの音声には、それぞれ音素 /k, t, p/ を設定する。

無声無気の閉鎖音は、なお声門にもあらわれて、極めて弱い閉鎖と破裂しかもたない [ʔ] が観察される。とくに緊喉母音の前では、この声門閉鎖は、はっきりと聞きとることができる。

[ʔœ̃⁴⁴ ʔœ̃¹¹ ã⁴⁴⁵] “to be low”, [ʔæ̃⁴⁴] “duck” [ʔa⁵⁵ k’ũ¹¹ ʔɛ̃²²⁴] “to knock a door”

この [ʔ] は、リス語で zero とは対立しない。たとえば [ʔæ̃⁴⁴] と [æ̃⁴⁴] は違った意味にはならない。それ故、たとえ [ʔ] の閉鎖と破裂が弱く、あるいはまったく認められない場合においても、音素表記には /ʔ/ をつけることにする。たとえば [-ã¹¹] は上掲のごとく、つねに先行母音と連結して声門閉鎖はまったくあらわれないが、その形態素を音素表記するときには /ʔ/ を用いることにする。これは構造的に見た単位の表現である。

2) 無声出気閉鎖音 /kh, th, ph/

完全な閉鎖と度合の強くない破裂をもつ無声出気音 [kʰ] [pʰ] [tʰ] が観察できる。この出気の氣息の持続は長くない。

[kʰɔ̃⁴⁴ ã¹¹] “to lean” [kʰã³⁵ tʰũ³³] “basket”

[tʰɔ̃¹¹ ã³³⁵] “to thrust at”

[pʰɔ̃³⁵ ɣũ²²] “to change” [pʰa¹¹⁵ ã¹¹⁵] “to be wet”

これらの音声を音素 /kh, th, ph/ で表記する。

[pʰ] のほかに [pʰf] が観察されるが、[pʰ] は [u] 母音とは連続することがなく、[pʰf] は [u] 母音とのみ連続するから、この両者は補い合う関係にあって、音素 /ph/ の変形 allophone と見なせる。

[pʰfu³³] “silver”, [pʰfɯ⁴⁴ ɣũ⁴⁴] “to open”

[zũ³³ pʰfui⁵⁵] “bladder”

3) 有声無気閉鎖音 /g, b, d/

完全な閉鎖と破裂をもち、そして軟らかい [g] [b] [d] が観察される。

[gi¹¹ ã³³⁵] “to go”

[dzã³³ gu³³] “path”

[bi : aŋ 335 :] “to be beautiful” [jiŋ 35 bvɯ : 33] “bowels”

[de : miŋ 33] “rice-field” [χœ : 11 duŋ 33] “fan”

[u] 母音の前で破擦音化する現象は、[p'] に対する [p'f] とまったく並行している。ただこの [bv] は両唇摩擦音をともなった [bβ] であることもある。¹⁵⁾

[dzɯ 35 βpuŋ 33] “blanket” [jiŋ 35 βpu : 11 mɯ 44] “lungs” [ba : 33 bvɯ : fi 33 :] “cheek”

これらの音声には、音素 /g, b, d/ をたてる。

4) 破擦音 /ts, tsh, dz/

破擦音には、alveolar [ts ts' dz] と palato-alveolar [tʃ tʃ' dʒ] と retroflex [ɬ ɬ' dʑ] が、たとえば、つぎの例で観察される。

[læ 11 tsɯ 44] “wrist” [ts'ɯ 44 : zaŋ 11] “rope” [dzɯ : aŋ 224 :] “to ride”

[tsaŋ 11 χwɯ : 44] “to expand” [ts'a : 11 bɔ 44] “salt” [dzaŋ 33] “boiled rice”

[tʃu : 33 liŋ 35] “boat” [tʃ'u : aŋ 335 :] “to burn” [dʑɯ aŋ 33 :] “to fear”

[ɬɕi : 55 jɛ 44] “sweat” [ɬɕ'i : aŋ 335 :] “to be sweet” [dʑi : aŋ] “to overflow”

ここに提出した例から推測できるように、これらの破擦音 ts, tʃ, ɬ etc. は、連続する母音音素との間に限定された分配関係をもっている。その分配関係を十分検討すると、三者の間で完全に補い合う関係が成立する。

	[i]	[u]	[ɔ]	[œ]	[ɯ]	[a]
[ts ts' dz]	—	—	—	—	+	+
[tʃ tʃ' dʒ]	—	+	+	+	—	—
[ɬ ɬ' dʑ]	+	—	—	—	—	—

これ以外の母音との結合例は、わたくしの資料にはない。したがって、これらの音声には、音素 /ts tsh dz/ をたてれば十分である。音素 /ts/ は [ɯ, a] 母音の前では [ts] であるが、[i] 母音の前ではそり舌音 [ɬ] の形をとり、[u, ɔ, œ] 母音の前では [tʃ] としてあらわれた。¹⁶⁾

5) 摩擦音 i) /s, ʃ, z, j/

摩擦音の第1として、上述の [ts] [tʃ] [ɬ] にあたる [s] [ʃ] [ɬ] が観察できる。しかし、

15) これから歴史的には、bu→bβ→bv→v の変化過程の成立を考え得る。あとで /vu/ とする形式の中にも、歴史的に見れば本来の /bu/ が含まれている可能性がある。

16) 芮逸夫の ts ts' dz : tɕ tɕ' dʑ は、筆者の /ts tsh dz/ : /kʲ khj gj/ の対立にあたる。主だった単語を比べるとつぎのようになる。

	Lisu in Tak (Nishida)	Lisu in Yünnan (Acad. Sin.)	Lisu in Yünnan (Ruey)	Lisu in Burma (Fraser)
“neck”	kúh-tsuw	?	ku 55 ts] 33	krgh ¹ -tsi ³
“to boil”	kja	tʃa ¹	?	tʃa ³
“salt”	tshàh-bo	tsha ⁵ bo ³	ts'a 11-bo 33	htsa ⁵ -baw ³
“crossbow”	khjäh	tʃhɛ ²	tɕ'ia 35	hchyá ²
“boiled rice”	dzah	dza ⁴	dza ¹² -p'u 12	dza ⁴
“water”	jih-gja	e ³ dʑe ³	ji 33 dʑia 33	yi ³ -jya ³

この三者の間には、上述のような完全な相補関係は成立しない。

まず [ʃi] と [ʃi], [ʃa] と [sa] の対立が、たとえばつぎの例で見出される。

[ʃi : aŋ¹¹⁵ :] “to kill” [ʃi : aŋ] “to be long”

[ti¹¹ ʃi : 21] “middle” [jiŋ³⁵ ʃi : 22] “blood”

[tʃʷ : 11 saŋ⁵⁵] “poor man” [tʰi : 11 ʃaŋ⁵⁵] “hundred thousand”

しかし、[ʃi] [ʃi] に対する [si], [ʃa] [sa] に対する [sa] は、それぞれ [ʃi] および [ʃa] のまれな変形としてしかあらわれない。わたくしの資料によると、[s] [ʃ] [ʃ] 三音と母音との間につぎの分配関係が成りたつ。

	[i]	[u]	[ɔ]	[œ]	[w]	[a]
[s]	—	+	+	+	+	+
[ʃ]	+	+	+	+	+	+
[ʃ]	+	—	—	—	—	—

この表によって、[s] [ʃ] [ʃ] は、それぞれ2種の母音と結合し、それ以上とは結び付かないことがわかる。その2単位に音素 /s/ /ʃ/ をたてる。この関係を、音素 /s/ は [i] 母音の前では [ʃ] に変形するが、それ以外の位置では [s] の形をとり、音素 /ʃ/ は [i] 母音の前で [ʃ] に変形し、それ以外の位置では [ʃ] であると表現すればいっそうわかり易い。

[s] [ʃ] に対する有声音 [z] [ʒ] は、つぎの単語に観察できる。

[zuŋ³⁵ bvu³³] “blanket” [zu : aŋ³³⁵] “to take”

[zaŋ¹¹] “son” [tu : 33 ʒɔ : 35] “to depart”

[z] は [w] [a] 母音に、[ʒ] は [u] [ɔ] 母音にのみ結合して、しかも “to take” は自由変形として [zu : aŋ³³⁵] をもつから、[z] と [ʒ] は完全に補い合っていることになる。これには、音素 /z/ を設定する。[ʃ] に対する有声音はないが、摩擦の弱い [j] とやや摩擦のある [j] がつぎの例にある。

[ja : 11 paŋ⁵⁵] “a dumb” [jɔ : 55 tʃi : 11] “to be important”

[jeŋ⁵⁵] “he” [jiŋ³⁵ wa : 33] “trap”

[ʔa¹¹ jaŋ⁵⁵-ma³³] “hen” [jœŋ : aŋ¹¹³ :] “to use”

[j] は、[a] [ɔ] 母音の前で、明瞭に [z] と対立するから、これには /j/ 音素をたてる。/j/ はあるいは /ʃ/ に対する有声音であると見なしてもよい。

ii) /x, ɣ, h, h̃/

まず軟口蓋摩擦音 [x] [ɣ] が、つぎの単語で観察される。

[jiŋ³⁵ zaŋ¹¹ xu : aŋ³³⁵ :] “to bear a child” [ɣu : 33 je : aŋ³³⁵ :] “to indicate”

[xa : aŋ⁵⁵ :] “to be good” [ɣaŋ⁵⁵ khu : 11] “cavern”

[jiŋ³⁵ xu : 11] “flour” [ɣu : aŋ³³ :] “to be far”

ここに音素 /x, ɣ/ を設定するのには問題はない。つぎに無声声門摩擦音 [h] とその鼻音化

[ŋ]	[m]	[n]
[ŋua ³³] “I”	[mafi ³³ tʃʊ ¹¹] “bamboo”	[na ³⁵] “disease”
[jifi ³⁵ ŋufi ¹¹] “language”	[mu ⁵⁵ tʃʊ ¹] “sickle”	[nu ³³] “thou”
[h̃u ³³ ŋɔ ¹¹] “shade”	[ʔa ⁵⁵ mofi ¹¹] “horse”	[ʔa ⁵⁵ nɔ ⁴⁴] “beans”
[ɲ]		
[tsʷu ³³ ɲi ³³] “sandal”	[ɲy ⁵⁵ ɲy:afi ⁵⁵] “to be short”	
[ɲi ¹¹] “two”	[ɲæfi ³⁵] “bird”	

このほかに唇歯音化した [ŋ] がある。

[jifi ³⁵ my ¹¹] “name”	[my ²²] “monkey”
[my ³⁵ afi ³³⁵] “to blow”	[my ³⁵ afi ⁵] “to be quick”

[ŋ] は, [y] 母音とのみ結び付いて, [m] と完全に補い合う関係にある。これに対して [ɲ] も [i] と結合する形式がほとんどであって, それに対立する [ni] 形式は出て来ないから, [n] と [ɲ] も同様に allophone であるように見える。しかし, この両者は実際には対立していて, 最後にあげた [ɲæfi³⁵] “bird” には, [ʔa næfi⁵⁵] “crow” が対立するから, 鼻音には四つの音素 /ŋ, m, n, ɲ/ を認めざるを得ない。

7) 側面音 /l/

摩擦のない有声歯茎側面音 [l] のみが観察できる。

[li ¹ afi ²³⁵] “to be heavy”	[lœ ¹ afi ³³⁵] “to be warm”
[læ ¹ afi ⁵⁵] “to be young”	[lu ¹ afi ⁵⁵] “to bark”

これには音素 /l/ をたてる。

子音音素結合 /kj khj gj/

リス語子音音素結合には, 弱い摩擦わたり音 [j] をともなう [kj, kʲj, gj] のみがあって, それ以外の結合はない。この主核子音となる軟口蓋閉鎖音はいずれも強く口蓋化され, 硬口蓋閉鎖音 [c, cʲ, j] である場合もまれではない。

[dza ³³ kja ¹ afi ⁵⁵] “to boil rice”	[kje ¹ afi ³³⁵] “to drop”
[kʲjafi ⁵⁵] “crossbow”	[kʲje ¹ afi ³³⁵] “to fall”
[jifi ³⁵ gjɔ ⁴⁴] “water”	[gjœ ¹ afi ²³⁵] “to blow (wind)”

これらに音素結合 /kj khj gj/ をたてる。

4. 母音音素

母音音素に関して, タークのリス語のもっとも大きい特徴は, すでに指摘したごとく, 普通母音と緊喉母音の 2 系列の対立が認められることであり, しかもその母音の性格とともない得るトネームの種類との間に, 規則的な分配関係が成立する点にある。ただし, 母音結合および鼻音化母音には, 緊喉母音はない。緊喉音は, 咽頭および喉頭をより緊張させて発出する母音

であり、雲南省のハニ語、ラフ語、リス語などにも認められることがすでに報告されている。¹⁷⁾ たとえば碧江のリス語には、

ha₃₁ 進歩 k'u₃₁ 塾 ɣu₃₃ 遠 li₃₃ 怎麼
hɔ₃₁ 摘 k'u₃₁ 歲 ɣu₃₃ 割 lɿ₃₃ 船

の4例があげられている。

このタークのリス語には、つぎのような対立例がある。

[hãf-maf ₃₃ :] “elephant”	[dɔ:af ₃₃ :] “to drink”
[ʔa ₁₁ -mq ₄₄] “who”	[dɔ'af ₄₄] “to go out”
[bi:af ₃₃₅] “to be beautiful”	[mw ₁₁ ha:33] “rain”
[bɿ'af ₄₄ :] “to be full”	[hɿ ₂₂ mɯ'af ₂₂₄ :] “to be hungry”
[tɕi:af ₂₃₅ :] “to suck”	[læf ₁₁ p'æf ₃₅] “hand”
[ʔa ₅₅ tɕi ₂₂] “goat”	[ji ₃₅ læ:22] “corner”

わたくしは、これらの例からタークのリス語にも、緊喉母音と非緊喉母音（普通母音）二つの対立した母音音素を認めたい。非緊喉母音と緊喉母音を音素表記上弁別するために、前者には /-h/ をつけてあらわした。母音音素の目録はつぎのようになる。

非緊喉 ih eh æh yh œh uɰ xh ah uh oh

緊喉 i e æ y œ u x a u o

これらの母音は、全体がととのった 4 + 4 + 2 の10母音体系をなしている。

これらの音素は、それぞれつぎの音声に該当する。/ih, i/ には [i] [ɿ], /eh, e/ には [e ɛ], /æh, æ/ には [æ ɶ], /yh, y/ には [y, ɥ], /œh, œ/ には [œ, ɶ], /uɰ, u/ には [u ɯ], /xh, x/ には [ɣ, ɣ̥], /ah, a/ には [a, ɑ] [a, ɶ], /uh, u/ には [u, ɯ] [U], /oh, o/ には [ɔ, ɒ] [o] がそれぞれあたる。

[a] に対する [a], [u] に対する [U], [ɔ] に対する [o] は、いずれも自由交替形であり対立した位置にはあらわれない。たとえば音素形式 /wu/ は [wu] になるよりも [wU] に聞こえるほうが多い。[wU:55 p'x:55] “comb” [wU:55 dy:11] “head”

また、これらの母音はすでに例示したごとく、有声声門摩擦音 [ɦ] をともなって発出される。録音したテープを逆にして、それを聞くと、[ɦ] または [h] として、たとえば [-afɦ] は、いつも [ɦa-] または [ha-] として明瞭に聞きとることができる。

つぎに10母音の対立を示す例を左側にあげ、その右側に音素表記をつけた。

17) 戴庆厦「談松緊元音」『少数民族語文論集』第2集 1958. 胡坦, 戴庆厦「哈尼語元音的松緊」『中国語文』1964.

ハニ語の場合、緊喉母音と非緊喉母音の対立の三つのタイプが、三つの方言によって代表されていて、その言葉の歴史的な発展段階をそれぞれ示していることは、ロロ系言語の歴史を考える上でも極めて重要な事実である。

[n̥i : 11] “two”	/ñih/
[neɦ 11] “witch”	/nèh/
[næɦ 11 dzɔ̌ 44] “breakfast”	/næh-dza/
[n̥y : 55 n̥y : aɦ 55 :] “to be short”	/ňyh-ňyh-ʔah/
[noe : aɦ 335 :] “to pick up”	/noeh-ʔah/
[jaɦ 11 ti : 55 nuu : aɦ 55 :] “to dye”	/nuh-ʔah/
[nɤ : aɦ 335] “to be near”	/nɤh-ʔah/
[ʔa 55 naɦ 11] “dog”	/ʔa-nàh/
[nu : aɦ 224] “to be soft”	/nùh-ʔah/
[ʔa 55 nɔ̌ 44] “beans”	/ʔa-no/

もちろん、母音音素（緊喉・非緊喉）と子音音素の結合には、かなりのすき間がある。たとえば /ts, tsh, dz, s, š, z/ のあとでは /uɦ u/ と /ɤh ɤ/ は対立しないとか、 /k, kh, g, x, ɣ/ のあとでは /yh, y/ と /œh, œ/ の対立がないなどの限定がいくつかあるが、いまはそれらをあげないで置く。

そのほか鼻音化母音がつぎの例で観察される。

[ĩ] [lɔ̌ 22 t'ĩ 55] “ladder”	[lĩ 33 so : 35] “pencil”
[ũ] [tʃ'ũ : 55] “onion”	[jiɦ 35 su 11 : sũ : 55] “number”
[õ] [jiɦ 35 t'õ 55] “flag”	[lõ 33 lĩã 41] “school”
[ā] [jiɦ 35 kã 33] “liver”	[pɤ 55 tã : 11] “sugar”

鼻音化母音があらわれるのは、すべて漢語あるいはタイ語からの借用語である。共通する鼻音化現象を /n/ 音素に該当する単位と見なして、これらを /in, un, on, an/ によって表記する。

母音音素結合

方言には、なお昇り型二重母音と降り型二重母音が観察される。

[ũa] [moɦ 11 kũa 33] “sky”	[jiɦ 35 xũa 11] “flesh”
[ɲũa 55] “fish”	[gũa 11 n̥i : 33] “to chew”
[ĩa] [bĩa 11] “bee”	[t'i : 11 hĩa 33] “hundred”
[ts'ɰ 22 pĩa 33] “foot”	[n̥ĩa 35 ɣu 44] “to catch”
[aě] [t'i : 11 tsaě 55] “village”	[kaě 33 tsu 11] “market”
[jiɦ 35 kaě 55] “a lid”	[haě 55] “slender”
[uě] [loɦ 55 suě 11] “a drop”	[sã 33 kuě 35] “throat”
[wu 55 kuě 33] “tortoise”	[kuě : aɦ 55 :] “to be dear”

これらの単語も漢語またはタイ語から借用された形式が多いが、 /u, i, a/ と /a, e, o/ が結

または -ɣu の連続である場合がもっとも多い。

ʔah-khùh “door” ʔah-báh “moon” ʔah-thàh “knife”
 jǐh-khò “age” jǐh-ɲùh “language” jǐh-kan “liver”
 xáh-ʔah “to be good” khù-ʔah “to cut” thǒh-ʔah “to thrust at”
 phu-ɣu “to open” týh-ɣu “to bury” tháh-ɣu “to join”

これらの例から明らかなごとく、ʔah-, jǐh- を先行する連続は、名辞表現であり、-ʔah, -ɣu をともなう形式は、つねに動詞表現である。核になる形態素が同じであって、ʔah-, jǐh- を先行する形式と -ʔah, -ɣu をともなう形式を共にもつ例も、もちろん少なくない。

prefix + 核形態素	核形態素	核形態素 + suffix
jǐh-fu “egg”	fu	fu-ʔah “to lay an egg”
jǐh-šíh “seeds”	šíh	šíh-ʔah “to scatter”
ʔah-thúh “thick”	thúh	thúh-ʔah “to be thick”

リス語には、いま一つ明瞭な単語構成法がある。それは“行為を表現する形式”と“行為に使う道具を表現する形式”と“行為をする人物を表現する形式”の対立をあらわす手順である。すなわち動辞表現とそれに該当する名辞表現が“道具名詞”と“行為者名詞”に形式の上で弁別される。

この三つの職能的な対立は、つぎのような productive な手順で形成される。

核形態素 + ʔah	核形態素 + duh	核形態素 + su
行為動詞	道具名詞	行為者名詞
(1) gi-ʔah “to chisel”	gi-duh “chisel”	gi-su “a man who chisels”
(2) ɣòh-ʔah “to fan”	ɣòh-duh “a fan”	ɣòh-su “a man who fans”
(3) dùh-ʔah “to beat”	dùh-duh “a bat”	dùh-su “a man who beats”

もちろん道具名詞に、さらに jǐh- をつける形式もある。

(4) tshǎh-ʔah “to brush”	jǐh-tshǎh-duh “a brush”	tshǎh-su “a man who brushes”
šíh-ʔah “to sweep”	jǐh-šíh-duh “a broom”	šíh-su “sweeper”

-ʔah を付随する形式がつねに動辞表現であるごとく、-duh, -su をともなう形式はつねに名辞表現である。

ʔah- あるいは jǐh- は、複合形式の第2の位置では省略される。たとえば上掲 jǐh-ɲùh “language” は、tae-ɲùh “Thai 語”, lò-hɛ ɲùh “Lahu 語”, li-suh ɲùh “Lisu 語”, màn-tsùh-ɲùh “ビルマ語” などでは、いずれも *li-suh jǐh-ɲùh のようにはならないで、li-suh ɲùh のようになる。同じように jǐh-mùh “fur” は、複合形式では, ǎh mùh “feather of bird”, ʔah nàh mùh “fur of dog” となって, *ʔah nàh jǐh mùh とはならない。

問題をもう少し複雑にして発展させてみよう。

sǔh dzù “tree” と jǐh ku-dzùh “skin” が複合すると, sǔh ku-dzùh “bark of tree” となる。ここでは前者の sǔh と後者の ku-dzùh が結合する。同じく mià sùh “eye” と “skin” が複合すると mià ku-dzùh “eye-lid” となる。ところが ná-hùh “mouth” と “skin” が複合すると *ná ku-dzùh とはならないで ná-hùh ku-dzùh “lip” となる。つまり複合形式に少なくとも二つのタイプがあることがわかる。

タイプ 1. $A \cdot B + \text{Prefix } j\ddot{i}h + C \cdot D \rightarrow A \cdot C \cdot D$

タイプ 2. $A \cdot B + \text{Prefix } j\ddot{i}h \ C \cdot D \rightarrow A \cdot B \cdot C \cdot D$

前者のタイプは主核形態素が A. すなわち sǔh-, mià- にあるときにおこり, 後者のタイプは, 主核形態素が B. あるいは A・B 共であるときにおこる。

muh “cloth (cotton)” と tshu-phǎh “foot” が複合すると, muh-tshu “trousers” となる。“足の布=ズボン”と表現されるが, このタイプの複合形式をタイプ3とできる。

タイプ 3. $A + B \cdot C \rightarrow A \cdot B$

hǐ “house” + vœ-ʔah “to fly” → hǐ-vœ “plane” もこのタイプに含めてよいであろう。

このような手続によって単語構成を調べると, 核になっている形態素を取り出すことができる。

3. 等式文と叙述文——肯定形式・否定形式・発問形式

リス語の文を大別すると, 等式文と叙述文に分け得る。この二つの文のタイプは, それぞれ特有の否定形式をもつほかに, つぎの点で区別される。等式文は基本的には, 二つの名辞表現から成りたち, 丁寧な発話では, その二つの名辞表現の間に休止がおかれる。叙述文は基本的には形態素 -ʔah に終わるか, あるいはその位置に入れ替わり得る付属形態素に終わる動辞表現と, それに先行する名辞表現から成りたつ。これも丁寧な発話では名辞表現と動辞表現の間に休止がおかれる。

等式文

qua # 名辞表現 ŋoh (または ŋah) # <私は……である>

qua # li su ŋoh # <私はリス人である>

qua # 名辞表現 mǎh ŋah # <私は……ではない>

qua # li su mǎh ŋah # <私はリス人ではない>

-ŋoh は ŋah にもなり得るが, mǎh ŋah は mǎh ŋoh とはならない。そして, この mǎh ŋah は連続して降り調子をとることも多い。

叙述文

qua # 動辞表現 (-ʔah) # <私は……する> qua # lah-ʔah <私は来る>

qua # mǎh 動辞表現 # <私は……しない> qua # mǎh lah <私は来ない>

等式文も叙述文も発問形式に換えるには二つの手順がある。

i) 高い昇降型の語調を加える。ii) 肯定形式と否定形式をつづけて並べる。

i) # li-su ɲoh <リス人です> → # li-su ɲoh [451] <リス人ですか>

ii) → # li-su ɲàh màh-ɲah <リス人ですか>

i) # lah-ʔah <来る> → # lah-ʔah [451] <来るか>

ii) → # lah màh lah <来るか>

まず等式文の名辞表現の環境に入り得る形態素を group S の形態素, 叙述文の動辞表現の環境に入り得る形態素を group V の形態素とよぶことにする。そして, ɲua の位置に替わり得る形態素も group S, màh に替わり得る形態素は, このほかには見出せないが, -ʔah に替わり得る形態素はいくつかあって, màh;-ʔah とつぎに述べる別の一類をまとめて, group E とする。リス語の形態素は, この3類 group S, group V, group E に大別できる。

4. リス語では, 主格<…は>, 対格<…を>, の関係は, 普通は特定の形態素によって表現されない。もっぱら語順がその関係を表現する。

subj. obj. pred.

ɲua # nàh-hõh dzoh-ʔah <私(は)帽子(を)もつ>

ɲua # dzur phèh do-ʔah <私(は)酒(を)飲む>

ɲua # nǎh tsù dzah-ʔah <私(は)薬(を)飲む(=食べる)>

ɲua # nǎh tsù dzah-ʔah <私(は)薬(を)飲む(=食べる)>

ɲua # nǎh tsù dzah-ʔah <私(は)薬(を)飲む(=食べる)>

これに対して, 日本語で<…を>を用いる関係が, 特定の形態素によって表現される場合がある。

subj. obj. pred.

ɲua # nu lǎh šèh gi-ʔah <私(は)あなたを思う>

ɲua # nu lǎh šèh gi-ʔah <私(は)あなたを思う>

この種の間係を表現するために使われる形態素をあげると, つぎのようになる。つまり叙述文の形式はつぎのように拡張され得る。

i) ɲua # S lǎh V-ʔah <私(は)……を……する>

ii) ɲua # S tǎh V-ʔah <私(は)……に……する>

iii) ɲua # S ʔuà V-ʔah <私(は)……で……する>

iv) ɲua # S toh V-ʔah <私(は)……から……する>

v) ɲua # S kji V-ʔah <私(は)……と……する>

vi) ɲua # S thǎh si V-ʔah <私(は)……より……である>(優勢)

vii) ɲua # S nǎh kuá V-ʔah <私(は)……より……である>(劣勢)

- i) ɲua # nu læh kòh lœh-jih-ʔah <私(は)あなたを(河に)沈める>
- ii) ɲua # nu tæh guh-ʔah <私(は)あなたにあげる>
- iii) ɲua # pàh-tǎh ʔuà ńi-ta-ʔah <私(は)椅子に坐る>
- iv) ɲua # kòh-thæh toh lah-ʔah <私(は)バンコクから来た>
- v) ɲua # nu kji gi-ʔah <私(は)あなたと行く>
- vi) ɲua # nu thæh si ʔùh-ʔah <私(は)あなたより大きい>
- vii) ɲua # nu nàe khuá zu-ʔah <私(は)あなたより小さい>

このほか、<……の>に該当する意味を表現する形態素がある。

- viii) S ʔih S # V-ʔah <……の……は……である>

sũh-dzù ʔih læh káh # ši-ʔah <(この)樹の枝(は)長い>

ただ、この ʔih は人称代名詞とは連結しない。同じ意味の関係は、人称代名詞の場合は、ʔih を使わずに限定する名辞表現に直接連結する。たとえば、

ɲua tshu ńi # xah-ʔah <私(の)サンダル(は)よい>

nu hih # guh-ʔah <あなた(の)家(は)遠い>

しかし、ńæh ʔih dýh lœh <鳥の翼>、ɲuá ʔih dýh læh <魚のえら>などでは、ʔih を使う。

以上の関係を表現する付随形態素をまとめると、つぎのようになる。

与格 læh, 対格 tæh, 於格 ʔuà 従格 toh 連格 kji, 属格 ʔih

これらの形態素はすべて、さきに掲げた màh, -ʔah と同じく group E に属させる。

これらの形態素の使い方は必ずしも日本語と一致しない。たとえば、日本語の<……に行く、……へ行く>にあたるリス語は<……で行く>と表現される。

ɲua # kjén-mài ʔuà gi-tšo-ʔah <私はチェンマイに行ったことがある>(直訳すると、チェンマイで行ったことがある)

上に掲げた文 i) ii) iii) は、なおいま一つの補語を含んだ場合、つぎのように拡張される。

- i-b) ɲua # S S læh V-ʔah <私は……を……に……する>
- ii-b) ɲua # S S tæh V-ʔah <私は……を……に……する>
- iii-b) ɲua # S S ʔuà V-ʔah <私は……を……に……する>
- i-b) jéh # ʔah-thàh ɲua læh fuh-lah <彼(は)ナイフ(を)私に送って来た>
- ii-b) ɲua # xo-ma nu tæh guh-ńi-ša <私(は)それ(を)あなたにあげる>
- iii-b) ɲua # thòh-gùh tšòh-tsu ʔuà kúh-ʔah <私(は)書物(を)机におく>

いわゆる直接補語には特定の形態素をつけない。なお、この例では、リス語の læh, tæh, ʔuà は、いずれも日本語の<…に>に該当する。

ここで動辞表現の受動形式について述べておきたい。リス語では受動形式は普通は使われない。強いて表現すれば、つぎのようになる。

主動形式 Subj. + Obj. + V-ʔah

受動形式 Obj. + Subj. + V-fu-ɣo

ɲua # fuh dɔh-ʔah <私(は)蛇(を)打つ>

fuh # ɲua dɔh-fu-ɣo <蛇(は)私に打たれる(打たれた)>

jih-ma-ma # jih zàh dɔh-ʔah <母親(は)子供を打つ>

jih zàh # jih-ma-ma dɔh-fu-ɣo <子供(は)母親に打たれる>

主動形式から受動形式への転換は、語順の置き換えと動辞表現の付属形態素 -ʔah を -fu-ɣo にかえて作られる。そして受動形式はつねに完了態 (V-ɣo) で表現される (cf. p.75)

5. Group S の形態素のうち、ɲua と直接交替する関係にある人称代名詞は、つぎの体系をもっている。

1. sg. ɲua pl. ɲua-nuh

2. sg. nu pl. nu-ʔua

3. sg. jéh pl. jéh-ʔua

複数形式は、単数形式に付属形態素をつけて形成される。その付属形式が 1 人称 -nuh と 2, 3 人称 -ʔua に分割されているのが特徴である。この -nuh または -ʔua は、そのほかの名辞表現にはつかない。リス語では、代名詞のほかは一般に数の範疇は成立しない。

人称代名詞の双数形式はないが、1 人称代名詞にのみ包括形 (inclusive) ʔah-vùh がある。とくに<あなたと私>を強調するときには、ʔah-vùh ñih zoh を使う。

つぎに ɲua # mýh ji-ʔah <私は仕事をする>は ɲua ko-dòh # mýh ji-ʔah <私自身が仕事をする>になる。このあとの形式は、ɲua <私>と ko-dòh <身体>からなる複合語であるが、これに該当する 2 人称・3 人称にはつぎの形式がある。

sg. (1) ɲua ko-dòh, (2) nu ko-dòh, (3) jéh ko-dòh

pl. (1) ɲua-nuh ko-dòh, (2) nu-ʔua ko-dòh, (3) jéh-ʔua ko-dòh

等式文の基本型、jéh # là tshóh xáh ših ɲoh <彼はよい人間である>にあたる叙述文は、jéh # xáh-ʔah <彼はよい>である。この文は、さらに jéh ɣù # xáh-ʔah <彼のものはよい>になり得る。この jéh-ɣù にあたる人称形式は、つぎのごとくである。

sg. (1) ɲua-ɣù (2) nu-ɣù (3) jéh-ɣù

pl. (1) ɲua-nuh ɣù (2) nu-ʔua ɣù (3) jéh-ʔua ɣù

すなわち代名詞の基本形式は、-ko-dòh, -ɣù をつけて拡張され得る。

6. リス語の指示詞の体系はつぎのようになっている。

thi 近称, goh 遠称, koh 最遠称, kóh 最遠遠称

あとの 3 形式はどの点で区別されるのか、あるいははっきりとした区切りがあるかどうかは詳らかではない。この形式は、

thi nàh-hǒh # jǐh bè この帽子は古い
 goh nàh-hǒh # jǐh ših その帽子は新しい
 koh nàh-hǒh # jǐh bè あの帽子は古い

のように名辞表現を限定するときに使われ、ものを指す場合には、基本形に -ma がついた形があらわれる。

thi-ma # jǐh bè これは古い
 goh-ma # jǐh ših それは新しい
 koh-ma # jǐh bè あれは古い

この -ma はもっとも普遍的に使い得る範疇詞であると考えてよい。指示詞の基本形式はまた場所を表現するときに -ʔuà がつけられる。この ʔuà は、先に述べた<…で>を意味する於格を示す形態素と同じである。

ʔua # thi-ʔuà ǎi-tá <私はここに坐る>
 ʔua # goh-ʔuà ǎi-tá <私はそこに坐る>
 ʔua # koh-ʔuà ǎi-tá <私はあそこに坐る>

ただ thi-ʔuà <ここ> より thóh-ʔuà あるいは thi-thóh の形式がよく使われ、goh-ʔuà は goh-ših-ʔuà と並存する。また、<ここにある>には、thóh kja という連続が使われる。

<今月> ʔah bah thǐh thi-ma, <今年> thi thǐh khò は、それぞれ<月・一・この>, <この・一・年>の意味であろうか。限定する名辞表現に先行するか後置するかによって thi と thi-ma の2形式が分配される。

そのほか指示詞の基本形には thèh zuh がつき得る。thi thèh zuh mỳ jè-ʔah <このようにする>, goh thèh zuh mỳ jè-ʔah <そのようにする>。

人物、事物、時間、場所、数などの発問は、つぎの形であらわされる。

[人物] ʔa-ma <誰> [事物] ʔa šì <何>
 [時間] ʔa-li-thæ <いつ> [場所] ʔa-li toh <どこ>
 [数] ʔa-mia <いくつ> [事由] ʔa-šì je <なぜ>
 [様式] ʔa-li thèh zuh <どのように>

これらの形式は -ʔah をともなって叙述文になり得る。たとえば ʔa-ma-ʔah <誰か?>, ʔa-šì-ʔah <何か?>, ʔa-li-thæ-ʔah <いつか?> など、

[時間]の thæ, [場所]の toh, [事由]の je <する>, [様式]の thèh zuh <……のように> を分離できるから、発問詞の基本形は、ʔa-ma <誰>, ʔa-šì <何>, ʔa-li <どれ>, ʔa-mia <いくつ> の4種になる。

7. 以上に述べた人称代名詞、指示詞、発問詞のほか、Group S としてまとめ得る単語は形式の上からつぎの8類に分けることができる。

(1) Prefix あるいは Suffix をもたない形式 (2) Prefix jǐh をともなう形式 (3) Prefix ʔah- をともなう形式 (4) Suffix -páh, -phah, -ma をともなう形式 (5) Suffix -zàh をともなう形式 (6) Suffix -dùh をともなう形式 (7) Suffix-su をともなう形式 (8) Suffix-tsur をともなう形式

つぎに各形式について説明を加える。

(1) Prefix あるいは Suffix をもたない形式

i) 1 形態素から成る単語

hoh “iron” nèh “witch” po “gun” phuh “silver”

ii) 2 形態素から成る単語

mùh-kúh “cloud” hè-khi “belly” náh-khǒh “ear-ring”

iii) 3 形態素から成る単語

loh dih pa “stone” lih tshah mih “forest”

4 形態素からなる kah-lah bùh-lo “butterfly” は、おそらく、kah-lah と bùh-lo に分析できる複合語であろう。

(2) Prefix jǐh- をともなう形式

さきに述べたように Prefix jǐh- は＜事物の名前あるいは事柄＞を示す職能をもっている。

jǐh xuà “flesh” jǐh dóh “bottom” jǐh sàe “voice”

jǐh- にはじまる単語の大半は、等式文 thi-ma # jǐh…poh <これは……である>, thi-ma # jǐh…màh pah <これは……ではない>の環境に入り得る。ところが、たとえば thi-ma # jǐh bèn # <これは古い>も可能である。この否定形式は、thi-ma # jǐh bèn màh bèn # または thi-ma # màh bèn であるから、また thi-ma # bèn le-ʔo <これは古くなった>ともなるから、叙述文と同じ形式をとっている。つまり thi-ma # jǐh bèn は、thi-ma # jǐh bèn bèn-ʔah 逐語訳すると、<これは新しさが新しい>と等価値である。したがって Prefix jǐh- にはじまる単語には、thi-ma # jǐh…poh # の環境に入る形式と thi-ma # jǐh…# の環境に入る2種類が含まれていることになる。

(3) Prefix ʔah- をともなう形式

この形式の単語には、五つの範疇をたてることができる。

i) 動物の名前 ʔah-ja<鶏>, ʔah-dzih<いんこ>, ʔah-phǒh<鼠>, ʔah-nǐh<牛> etc.

ii) 親属名称 ʔah-zàh<祖母>, ʔah-páh<祖父>

iii) 器物の名称 ʔah-khùh<戸>, ʔa-lùh piah<シナ鍋>, ʔah-tshǒh<斧>

iv) 状態を事柄として表現する形式

thúh-ʔah <厚い> → ʔah-thúh <厚さ>, moh-ʔah <高い> → ʔah-moh <高さ>, ših-ʔah <広い> → ʔah-ših <広さ> この形式を作り得る形態素の範囲は限定されている。

v) その他 ?ah-bàh<月>, ?ah-tóh<火>, ?ah-ma<誰>, ?ah-no<豆> etc.

(4) Suffix -pah, -phah, -ma をともなう形式

-pah, -phah は人間および動物一般の男性を, -ma は女性をあらわす。-pah と -phah は補い合って分配されているが, -phah のほうが分配範囲は広い。

i) -páh : -ma

líh-páh <孫> líh-ma <孫娘>

?ah-vàe páh <雄豚> ?ah-vàe ma <雌豚>

?ah-tshì páh <雄羊> ?ah-tshì ma <雌羊>

ii) -phah : -ma

?ah-nàh phah <雄犬> ?ah-nàh ma <雌犬>

?ah-já phah <雄鶏> ?ah-já ma <雌鶏>

?ah-ñih phah <雄牛> ?ah-ñih ma <雌牛>

wóh-phàh <伯父> wóh-ma <伯母>

nèh phah <巫師> nèh ma <巫女>

<象> hah-ma も hah-ma phah <雄象> hah-ma ma <雌象> となり得る。

(5) Suffix -zàh をともなう形式

zàh は 本来<子供, 息子>を意味する zàh と同じ形態素であって, 指小形式 (diminutive) を構成する。mò <草> → mò-zàh <小さい草>, ?ah-nàh <犬> → ?ah-nàh zàh <小犬>, súh xùh <箱> → súh xùh zàh <小箱>, ŋuá <魚> → ŋuá zàh <小魚>, fuh-béh <瓶> → fuh-béh zàh <小瓶>。

(6) Suffix -dùh をともなう形式

この suffix は, 動辞表現 V-?ah 形式の -?ah の位置に換わってその行為に用いる道具を示す。上掲例 p. 65 参照。

(7) Suffix -su をともなう形式

この suffix も同様に動辞表現 V-?ah の -?ah に換わってその行為者を示す。móh-?ah → <ねらう> → móh-su <ハンター>, lah-?ah <来る> → lah-su <来る人>, vùh-?ah <売る> → vùh-su <売る人>, ŋuá miá <魚を釣る> → ŋuá miá su <魚釣り人> etc.

(8) Suffix -tsu をともなう形式

tsu の職能はとくに明らかではないが, 漢語の“子”に該当するものと考えられる。-tsu をもつ形式の中には, “子”の形をもった漢語からの借用語も含まれているから, この一連の単語は本来のリス語であるか漢語からの借用語であるか弁別し難い。

tsoh-tsu “table” <桌子>, vǎh-tsu “socks” <襪子>

kúh-tsu “neck”, kae-tsu “market” <街子>,

nəh-tsu “medicine”, páh-tsu “town”, leh-tsu “chain” làh tsu “wrist” etc.

8. Group S の単語の中で、はっきりとした体系をもつものに数詞がある。リス語の数詞はつぎの形式をもっている。

1 thèh 2 ñih 3 sa 4 líh 5 ɣuà 6 tshò 7 ših 8 hè 9 kúh 10 tshu 11 tshu tíh
12 tshu ñih 13 tshu sa 14 tshu líh 15 tshu ɣuà 16 tshu tshò 17 tshu ših 18 tshu hè
19 tshu kúh 20 ñih tsu 30 sa tshu 40 líh tshu 50 ɣuà tshu 60 tsho tshu 70 ših tshu
80 hè tshu 90 kúh tshu 100 thèh hía 1,000 thèh tu 10,000 thèh wan 100,000 thèh šáh
1,000,000 tshu šáh

リス語の数詞は10進法をとり、たとえば12は10+2のごとく上位の桁と下位の桁の数詞が直接連結して、その間に別の形態素は入らない。“1”は thèh と tíh の2形式をもち、“10”も tshu と tsu の2形式をもつ。しかしこれら二つの形式は、同じ環境には用いられず、後の形式 tíh と tsu の分配範囲はごく限定されている。tíh は“11”のみに用いられ、そのほかの場合、たとえば “half” thèh bəh, “one hour” thèh ših ši でも、thèh が使われる。一方の tsu も同様に “20”の場合に限って用いられる。しかし、“120” thèh hía ñih tsu, “220” ñih hía ñih tsu, でも tsu が使われる。したがって、thèh と tíh, tshu と tsu は allomorph としてよい。

この基本数詞には suffix-gàh がついて、序数詞をあらわし得る。

1st thèh-gàh 2nd ñih-gàh 3rd sa-gàh 4th líh-gàh 5th ɣuà-gàh 6th tsho-gàh
7th ših-gàh 8th hè-gàh 9th kúh-gàh 10th tshu-gàh

名辞表現が数詞をとまなう場合、必ず範疇詞が要求される。wúh-dyē thih-ma <頭一つ> làh phəh ñih bàh <手2本>のように、数詞←範疇詞の順序に並べられる。

híh sa-sùh <3軒の家>, ʔah-ja-fu ɣuà khu <5個の卵>など、リス語には範疇詞の種類がかなり多い。その中でもっとも普遍的に使われるのは、mà であり、漢語の“個”に該当する。

リス語の範疇詞については、ここでは扱わず別の一文において取り上げることにしたい。

9. 数詞と同様に group S の単語の中で、一つの体系をもったものに十二支がある。リス語の十二支は、寅からはじまる。

làh <寅>, thoh-lah <卯>, luh <辰>, fuh <巳>, mòh <午>, zóh <未>, mý <申>,
gáh <酉>, khùh <戌>, və <亥>, hăh <子>, ʔah-ñih <丑>,

リス族では、年ばかりでなく日にも同じように十二支を配分するから、làh-kho <寅の年>, thoh-lah kho <卯の年>, luh-kho <辰の年> などとともに làh-ñi <寅の日>, thoh lah ñi <卯の日>, luh-ñi <辰の日> のような形式ができる。1965年は fuh kho <辰年> であり、毎年1月29日から kho ših <新年> がはじまるとされる。

この十二支の単語形式は、漢語からの借用語ではなく、本来のリス語の動物名を用いている

が prefix ?ah などが除かれて形式が簡略になっている。＜虎＞lành-ma (これは lành-phah＜雄虎＞に対する形), ＜うさぎ＞thòh-lah, ＜たつ＞luh, ＜蛇＞fuh, ＜馬＞?ah-mòh, ＜羊＞?ah-zoh, ＜猿＞mỳ, ＜鶏＞?ah-ya, ＜犬＞?ah-nàh, ＜豚＞?ah-væ, ＜鼠＞?ah-hăh, ＜牛＞?ah-ñih, とくに＜犬＞は普通の単語と十二支に入る単語でまったく形が変わっていて, 現在タークのリス語では ?ah-nàh と khùh の両形式が補い合って並存していることになる。

10. 叙述文を構成する動辞表現の基本型は group V-?ah であった。この形式と補い合うのが V-γw である。しかし, -?ah 形式の単語と -γw をともなう単語の分配関係は, 必ずしも厳密に区別できず, またその意味の相違もよくつきとめられないから, 今はただ, 動辞表現の基本型は V-?ah であるが, 一部で準基本型 V-γw 形式があると考えておきたい。

この基本型 V-?ah に替わり得る動辞表現の形式は, つぎの以下17である。

1) 基本型 V-?ah. その否定形式は, 上掲のごとく mành-V である。

gua # tshù-?ah <私は洗う> gua # mành tshù <私は洗わない>

gua # gi-?ah <私は行く> gua # mành gi <私は行かない>

gua # dzàh-?ah <私は食べる> gua # mành dzàh <私は食べない>

2) V-γw: 基本型 V-?ah と補い合う準基本型である。その否定形式は V-?ah と同じく, mành V である。

gua # phuh-γw <私は開ける> gua # mành phuh <私は開けない>

gua # gáh-γw <私は開ける> gua # mành gáh <私は開けない>

3) V-kuá-?ah: 基本型 V-?ah に対する可能態を示す形式である。その否定形式は mành-V-kuá である。

gua # lah-?ah <私は来る> gua # lah kuá-?ah <私は来れる>

gua # tǎh ñi-?ah <私は見つめる> gua # tǎh ñi kuá-?ah <私は見つめ得る>

gua # mành lah kuá <私は来れない> gua # mành tǎh ñi kuá <私は見つめられない>

この kuá-?ah に替わって dah-?ah を用いることもできる。gua # lah-dah-?ah しかしインフォーマントは kuá-?ah のほうをよく使うという。

gua # lih-suh gùh khjœh kuá-?ah <私はリス語を話せる>。

gua # thih-ma pýh kuá-?ah <私はこれを運ぶことができる>。

gua # šăh pùh kuá-?ah <私は修理できる>。

4) V-kja-?ah: 基本型 V-?ah に対して進行態を示す形式である。その否定形式はない。

jǐh # tǎh-?ah <彼は走る> jǐh # tǎh-kja-?ah <彼は走っている>

gua # dzah dzàh-?ah <私は御飯を食べる> gua # dzah dzàh-kja-?ah <私は御飯を食べている>

5) V-kji: 基本型 V-ah に対して使役態を示す形式

ɲua # ɲuh-ʔah <私は泣く> ɲua # ɲuh-kji <私が泣かせる>
 nu # dɔh-ʔah <あなたは打つ> nu # dɔh-kji <あなたが打たせる>
 ɲi-ta-ʔah <坐る> ɲi-ta-kji <坐らせる>

- 6) mǎh V-hè: 基本型 V-ʔah に対して未然態 (まだ……していない) を示す形式

jéh # lah-ʔah <あの人は来る> jéh # mǎh lah-hè <あの人はまだ来ない>
 jéh # mý je-ʔah <あの人は仕事をする> jéh # mý mǎh je-hè <あの人はまだ仕事をしない>
 その発問形式には ʔáh [高平降調] がつけられる。
 jéh # mǎh lah-hè ʔáh <あの人はまだ来ませんか>
 jéh # mý mǎh je-hè ʔáh <あの人はまだ仕事をしていないか>

- 7) V- tsóh-ʔah: 基本型 V-ʔah に対して過去の経験を示す形式 (……したことがある)。その否定は mǎh V-tsóh であらわされる。

ɲua # lah-ʔah <私は来る> ɲua # lah-tsóh-ʔah <私は来たことがある>
 ɲua # thòh xuě mǎh lah tsóh <私は一度も来たことがない>
 jéh # gi-ʔah <あの人は行く>, jéh # gi-tsóh-ʔah <あの人は行ったことがある>
 jéh # mǎh gi-tsóh <あの人は行ったことがない>

- 8) V-tsoh-ʔah: 基本型 V-ʔah に対して、義務を示す形式 (……ねばならない)。その否定形式は V-mǎh tsóh である。

ɲua # gi-ʔah <私は行く> ɲua # gi-tsóh-ʔah <私は行かねばならない>
 ɲua # thòh xùh bóh-tsóh-ʔah <私は字を書かねばならない>
 ɲua # gi-mǎh-tsóh <私は行ってはいけない>

- 9) V-xo: 基本型 V-ʔah, 準基本型 V-xu に対して完了態を示す形式

ɲua # vuh-ʔah <私は買う> ɲua # vuh-xo <私は買った>
 ɲua # vùh-ʔah <私は売る> ɲua # vùh-xo <私は売った>
 nǎh-xu <止む> nǎh-xo <止んだ>
 bàh-xu <きざみ切る> bàh-xo <きざみ切った>

- 10) V-leh-ʔo: 基本型 V-ʔah に対して完成態を示す形式 (……してしまう), これはタイ語の léew を借用して作られた形ではなく, 上掲 9) 完了態 xo をともなった leh-xo (?) と考えてよいかもわからない。その否定形式は mǎh V-leh である。

kje-koh-ʔah <落ちる> kje-koh-leh-ʔo <落ちてしまった>
 これは kje-xo <落ちた> と並存する。mǎh kje-koh-leh <落ちていない>
 sǔh vèh hòh-ʔah <花が枯れる> sǔh vèh hòh-leh-ʔo <花が枯れてしまった>
 sǔh dzùh dzuh-ʔah <木が乾く> sǔh dzùh dzuh-leh-ʔo <木が乾いてしまう>
 sǔh dzùh mǎh dzuh-leh <木が乾かない>

11) V-ñh-ša: 基本型 V-ʔah に対する願望をあらわす形式

ɲua # gi-ʔah <私は行く> ɲua # gi-ñh-ša <私は行きたい>

ɲua # nu tǎh guh-ʔah <私はあなたにあげる>

ɲua # nu tǎh guh-ñh-ša <私はあなたにあげたい>

12) V-lǎh-xo: 基本形 V-ʔah に対して, その相互形を示す形式 (互に……する)

tsǐh-ʔah <引っぱる> tsǐh-lǎh-xo <ひっぱり合う>

nǝh-ʔah <重なる> nǝh-lǎh-xo <重なり合う>

nǝh-je-ʔah <従って行く> nǝh-lǎh-xo-je <従えあって行く>

13) V-ʔah mǎh V-ʔah: 基本形 V-ʔah に対する発問形式を示す。

súh-ʔah <知る> súh-ʔah mǎh súh-ʔah <知っているか>

gi-ʔah <行く> gi-ʔah mǎh gi-ʔah <行くか>

lǎh-ʔah <十分である> lǎh-ʔah mǎh lǎh-ʔah <十分か>

14) thǎh-V: 基本形式 V-ʔah に対して禁止を示す形式

ɲuh-ʔah <泣く> thǎh ɲuh <泣くな>

wǎh šœh-ʔah <笑う> thǎh wǎh šœh da-ma <大きい声で笑うな>

15) V#, V-ʔeh: 基本形式 V-ʔah に対して, その命令形式を作る。

nu # gi-ʔah <あなたは行く> nu # gi, nu # gi-ʔeh <行きなさい>

nu # lah-ʔah <あなたは来る> nu # lah, nu # lah-ʔeh <あなた来なさい>

16) V-lóh [高平降調]: 基本型 V-ʔah に対して, 驚きの感情を示す。

ɲua # sah to-ʔah <私は恥しい> sah to-lóh <恥しいね.ノ>

ʔah-ših xáh-ʔah <驚く> ʔah-ših xáh-lóh <驚いたね.ノ>

17) V-ma: 基本型 V-ʔah に対して, 動名詞形 (……であるのは, ……ことは) を作る。

jéh # lah-ʔah <あの人が来る>

jéh # lah-ma ʔah-khùh xáh-ʔah <あの人が来ることはたいへんよろしい>

ɲua # lah-ʔah <私が来る>

ɲua # thi-thòh lah-ma lih-suh gùh so-ʔah

<私がここに来たのは, リス語を学ぶ(ためである)>

11. 連動式 group V の単語に, 同じく group V の単語が結び付いて, 二つの連続した動作あるいは主要形態素のあらわす動作の趨勢方向を示すことがある。結び付く形式は, つぎの<行く><来る>の意味をもつ形式がもっともよく使われる。V-je-ʔah <…して行く>, V-lah-ʔah <…して来る>。これに対して, V-gi-ʔah の結合は可能ではない。

tǝh-ʔah <走る> tǝh-je-ʔah <走って行く> tǝh-lah-ʔah <走って来る>

dòh-ʔah <入る> dòh-je-ʔah <入って行く> dòh-lah-ʔah <入って来る>

kje-ʔah <落ちる> kje-je-ʔah <落ちて行く> kje-lah-ʔah <落ちて来る>

tǎh-ʔah <もつ> に対して <もって来る> tǎh-lah-ʔah, <もって行く> tǎh-je-ʔah は、あとに結合される形式の相違によって表現される。さらに核形態素 hòh, zuh, xòh などについて、つぎのように V-V-je-ʔah, V-V-lah-ʔah の形式を作ることも可能である。

hòh tǎh-je-ʔah <運んでもって行く> hòh tǎh-lah-ʔah <運んでもって来る>

zuh tǎh-je-ʔah <手につかんでもって行く>

zuh tǎh-lah-ʔah <手につかんでもって来る>

xòh tǎh-je-ʔah <引っぱってもって行く> xòh tǎh-lah-ʔah <引っぱってもって来る>

zuh do-lah-ʔah <手につかんでとり出す>

もちろん group V の単語の性格によって、結び付き得る形式が限定されるのも当然である。tu-lah-ʔah <立ち上る> はあり得るが *tu-je-ʔah はない。

これらの連動形式は V-lah-ʔah, V-je-ʔah と V-ʔah 形式が並存する点にも特徴がある。

このほか、V-V₂-ʔah の結合形から、共通の形態素 -V₂- として -gùh-, -ñih-, -fu-, -tá を引き出すことも可能である。

boeh-gùh-ʔah <分配する>, tǎh-gùh-ʔah <贈る>, beh-gùh-ʔah <答える>

これは gùh-ʔah <与える> と同じ形態素と考えられる。

na-ñih-ʔah <たずねる> hùh-ñih-ʔah <待つ>

tsùh-ñih-ʔah <のぼす> guà-ñih-ʔah <かむ>

šǎh-ñih-ʔah <ふれる>

これらは、tǎh-ñih-ʔah <みつめる>, khje-ñih-ʔah <量ってみる> の -ñih-ʔah と同じ形態素であろう。

beh-fuh-ʔah <命令する>, tshǎh-fuh-xu <拭い消す>, khùh fuh-ʔah <あくびをする>

これらに含まれる fuh-ʔah は fuh-ʔah <放す> と同じ形態素である。

jì-táh <ねむる>, ñì-táh <生きる> (その完了態形式は、jì-táh-xo, ñì-táh-xo である) に使われる táh は <…の点に至る> の意味であろうか。

このような動辞表現の複合形式はこのほかにも考え得るがここではあげない。

12. リス語の group V の単語の中で、自動詞と他動詞の区別が、音素形式の一部のみに対立をもつ二つの形態素で示されることはまれで、つぎのような関係で表現されることが多い。

1) gua # ŋuh-ʔah <私は泣く> fuh-béh bù xu <瓶が割れる>

2) gua # dǎh ŋuh-ʔah <私が泣かず> ŋua # fuh-béh dǎh bù xu <私が瓶を割る>

つまり2)は、逐語的には、<私は打ち……する> の意味になる。これと類似する表現につきの例がある。

hìh # bòh leh-ʔah <家が倒れる> hìh # ŋua hòh bòh leh-ʔah <家を私が倒す>

loeh-je-ʔah <沈む> ɲua # kàh loeh-je-ʔah <私が沈める>
 ɲòh <押して?>, kàh <押えて?>を核形態素に先行させて, 他動詞としての意味を作りだすのである。

自動詞と他動詞が相互に関連のない音素形式をもつ2形態素で分割して表現されることもある。

thòh-xùh xàh-le-ʔo <紙がやぶれた> : ɲua # thòh-xùh hōh-xo <私は紙を破った>
 jǐh zàh mih-ʔah <子供が生まれる> : ɲua # jǐh zàh xuh-ʔah <私が子供を生む>

しかし, つぎのように二つの形態素の一部の対立が, 自動と他動といった職能の違いをになっている例もある。

ɲua # sǔh-dzùh lǎh kje-koh-le-ʔo <私は樹の枝から落ちる> → kje-
 ɲua # sǔh-dzùh lǎh khje-koh-le-ʔo <私は樹の枝から何かを落とす> → khje-

この種の例はごく限られた数しかない。また,

phxh-xu <解く> vuh-ʔah <買う> sáh-ʔah <むつかしい>
 xǎh-xu <結ぶ> vùh-ʔah <売る> sah-ʔah <易しい>

のように初頭音の性格や声調の違いが対立した意味の差異をになっているのも見逃せない。

13. リス語にも数は多くはないが group S の単語と group V の単語が連続して構成する一つの動辞表現がある。たとえば,

wúh-pǎh pǎh-ʔah <頭を梳く>
 dzùh-xǎh xǎh-ʔah <帯をしめる>

これらは否定形式では, wúh-pǎh màh pǎh, dzùh-xǎh màh xǎh となるから, これらを, それぞれ二つの形態素から成る group S と group V の単語連続と見なすべきである。

つぎにこれと関連して, group S の単語と group V の単語が声調の相違によって弁別される例をあげる。

dzah <飯> jǐh-gùh <歌> nǎh <傷, 病気>
 dzàh-ʔah <食べる> gúh-ʔah <唱う> nah-ʔah <病気になる, 傷つく>

14. 限定関係 group S の形態素が group S の形態素を限定するときには, 上に述べた数詞+範疇詞によるほかは, 必ず限定+被限定 (S→S) に並べられる。

wah-dzih → wúh-dȳh (山→頭) <山頂>
 ʔah-tsǐh → wúh-dȳh (乳房→頭) <乳首>
 wúh-dȳh → nǎh (頭→病) <頭痛>
 hi khǐh → nǎh (腹→病) <腹痛>

これに対して, group S の形態素が group V の形態素に限定されるときには被限定+限定 (S←V) の順に並べられる。

là tshóh←màh-xáh (人間←良くない) <良くない人>

là tshóh←pháh (人間←肥る) <肥った人>

zàh guh→lǎéh (男←若い) <若者>

jǐh-gja←dàh-ma (水, 河←大きい) <大河>

group V の形態素が, group S の形態素に限定されるときには, 限定・被限定 (S→V) の順序をとる。

thìh thǎh→gi-?ah (一度→行く) <一度行く>

ñìh hǔa→tshùh-?ah (二回→洗う) <二回洗う>

?ah-khùh→xáh-?ah (たいへん→良い) <たいへん良い>

これらの限定・被限定の関係がもっと拡張され, 上述の関係が組み合わさったときには, たとえば<この一人の肥った良い人間>, <その一匹の白い犬>は, それぞれつぎのように並べられる。

この人間	一人の人間	良い人間	肥った人間
S→S	S←S	S←V	S←V
thi làh-tshóh	làh-tshòh thìh-zo	là-tshóh xáh	là-tshóh pháh
S→S	←V ←V	←S	
thi là-tshóh	xáh pháh	thìh-zo	<この一人の肥った良い人間>

その犬	一匹の犬	白い犬	大きい犬
S→S	S→S	S→V	S←V
xo ?ah-nàh	?ah-nàh thìh-ma	?ah-nàh puh	?ah-màh dàh-ma
S→S	←V ←V	←S	
xo ?ah-nàh	puh dàh-ma	thìh-ma	<その一匹の白い犬>

あ と が き

以上, タークのリス語の音素構造および文法体系について基本的な事柄を記述した。範疇詞やその他の不備な点は, 資料の再検討によって, 今後補っていきたいと思う。

未調査のコトバを調査するには, 多くの困難がともなう。そして, その資料の分析にもとづいた結果の発表には, 個々の事実の決定に関してかなりの決断がいる。果たしてそうであるかどうか, 確信をもてない場合もある。これらの事実については, 記述方法の検討とともに何度も繰返してたしかめねばならない。

ここに提出した一文は, あくまで予備的な報告であることをお断りしておきたい。